

9
8
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
90
1
2
3
4
5
6
7
8
9
100
1
2
3
4
5



草庵和歌集家求諺解卷第7

梅月堂僧宣阿集編

梅仙堂平景新訂正

秋寄下

妙法院三畳は親王家八月十八夜十五首寄人今

待十五夜月

妙法院在滑谷道南大佛殿東

うねくどうやくあく秋の夜がとくちくとくや月はいでぐとくら
いとびていおぐとくわむ。行踏着たとくか。あがとくとく五夜の月を
詠も待たて。とてナ五日も處ても朝とくとくひだりゆくとくハロ、也。秋のす
とあくば月とくとくおへきまわたり。かくに詩今をゆく今夜
の空さへ。とくかとくまくまく。秋の本とくとくなやん。お

あらとひづり也

序子た入道大納言家十首小 八月十五夜

秋は夜小照月をみぬかとへ水うきうれ新もみる
冰の面小照月をかゞられべと夜ぞ秋のも中だけ秋
樹た數ち風のたゞかとへ水をとむに活ぞ立くも
月を立す。并のまよ。正月、二月、三月立六七八となく月を立く
て。夜のみ極ゆきがみな人よ。何も并をせ。并を消ゆめりそ
云少く冰うきうれと月報のゆううれりそ。力ゆきとかく
すして秋の最中ともよしと

金蓮寺少く歌をほづて月百首奇才節叶

れまつてうを

老てとあやしむ月をかねりづづくといつたるときうん
月をかねりづづくはげでもうト方をとす。と秋ひ秋のまよ

えゝ感じて。我身れ百歳の木並十歳の木もぢりいづづく
色まで。年のつゝ老ふるとかじりと八十歳餘半での長生と
ましく五十歳の時ひどくとてとてと一幸と懷旧の情思づく
我身もすばとひ。人壽増減却れ說く。と百歳の時す當
ふ少くよし。と先百歲を大概のほどの半にまくとわうゆ。な
どとくへ五十歳の木より歲也。曲禮曰百年曰期。注人壽以百
年為期。故曰期共あり。縱有百年。今過半。元日。范石湖瀛
川。河内。一說伊安

河月そ

竹はれうちのひだりとぬすよとれく。夜づく月暮うげうか
御事の流々くはは行川の御れ締もきひくさんとお難御内
締なる月は極ゆきもくとゆ。とくへ行の家よまと云。行
川。河内。一說伊安

里月

よるより川をとねぐらの旅ノシテ月をか月うき
夜のそれと川音も月も流物かしへよう。川音かくらとは
川音ハ川あたて流す。月とくは流也。義立野の里ゆく川音の
月とくをまくふり流すが。義立野流乃東也。

拂ひた入通大納言家四季の百首秋小

みよせたまう川うち水素とれてふうせきくすらる月教
たまう河内といなまわん。だざる体。前よ。河内。川の如程と
つゝ苦野川。淺洋は内よ。高殿と短奇方。外されぬ麻うま
流すみよせ、まくら河内よみをだすとも

如義生師

玉吾

そまう

川内よ。風清く吹て。素と晴。月も一入瀧る

はや津井すとせむ

河月

玉野やたら川音せとく。あまうとやくねう月のうけかす
素う水のとくうきくろ行ひ。ハリたしかにと。素とれて

歌は月う水の教たまうてやうりう也。玉野。肥前國也
さんやと云ふ。こまうて

さけうたうせれどかとく棹の音うか月未しげられ
高流流。河内奥也。禁野よ近し。禁野。支那也。天河。内ほ。さ
や天子の御膳。供の鳥を狩て石少く。木少く。人少く。物をさ
でぬよ。りて。禁野。いも。よらう。綾のう。一字のひ。多く。哉也。
これに綾のう也。下に哉と有。月も流。舟とく棹の音ま
でとすじ。夜の文うる。見るまうとく。からう。鶴乃
羽がとく。やまとて。神より深草の里。陸羽書 番奇合。見うる病
のやうと。おまうと。はう。月め。秋風を吹秋風吹。外ちまう此
里人の音を。遠く。衣す。衣す。支那書 賢ひうそとよそと
絶えまう。かくえ。神う材あれを

如義生傳三首

玉雅二

はや長聲とあけ。日吉社六首

秋

かみをぬくればかねをこみての月や船原
都よりそのへまわらるの江せうやまよめく
れ河。船原ひよそ。晚景す。ふをあて後よよかく秋ひゆう
住り果どかねの横川のあらいくねをつくる。首とくづり
すに月ひやすうそひまどとすしんと。かひやう。船長く住む
てだしてあさまを協うかとこすうべ。船をくまと。川を
あてほいくれと見ても月ひたかぐれ。又一往。船をくと。川が
て又一月かれる。ほかまは住もととど。おまへはのよ川り水す。
今も月ひやすう。船原ひよそ。それへ三日のかよ。二十九ひのと
して五のとへはる向むせばけたひよくれを

將軍家かく船をばくそ月ナム首すよアキミテ

河月

かみれ川下本多うじい北乃れ船をくわうとせむりそ

ひく人のさく本多うじいとくふのりひとひよど舟ひがひだ方丹
生川。伊勢也。丹生大明神も。丹生大明神ひ。大和も。天孫れと皇
子也。河水。力の源。とくに冰のやうにとくに。また代を
ながすめて。うてへ水とひたとく。また。またとをうすひ。月と
氷とをうすひ。とく。また。思ひ。とく。とく。また。とく。わる
ま。秦甸。一千里。凜々。氷鋪朝涼八月十五夜。月と氷よそ。う。詩也
月清み教の秋を。又。度。たは千里にあまう氷也。う。後成。此
名の依保よ。ひひきり。此。また。う。詩也。あ。う。れ。ま。紙

詩してよろく也

兵庫院長秀あゆく 沢月

かみより川霧とて。あくごく。かねくす。月うと
夕ひ。旁深く。物うれも。くね。月の。あく。ゆく。傍暗く。
あく。身をこぐ。佐保川の。ほく。かく。う。す。身の棹を
名の依保よ。ひひきり。此。また。う。詩也。あ。う。れ。ま。紙

つも有難候とうなとの頃也。此すい。佐保の渡口也。佐保川
今小川也。昔は深くて舟多く。舟多く。舟多く。舟多く。陵谷の変。
東海塗田。左木有木也。

妙法院宮十首奇句

澤月

うづきに邊より月のやうが水ままでも霞やきよし
草た埋まつてはる月のやうも見るまでさん。がく重
どくそえゆははをうづみ見る。まのよし。病のをたてうの
あよ月の底ぐるりとみせみ草の水草也。

晝間月

秋れ衣の宿る月も苦れ事かひくとてとうふややア池も
戸れそにぐれてほしはのまうすやもあそび冬の事なり
重き本す。苦れそにぐれてほし小屋も冬の本く。苦れ葉
の枯れそに小屋もあそび冬の本す。苦れ葉の枯れそに

秋少^サ芦もさきに枯らして。月もとまらぬかくれて。渡て。わざたれ
かれ。本す。い是陽と。小屋も。のむけいは。ばす。す。名の方
と停かれて小屋もこもうへ。宿る月は月のやうに春。月は

聖護院入道親王家三首

月華草花

金糞小屋の月れ秋もれ。尾花がさももあから秋はも
尾花が波。白さと。尾花たまうは。并まし。若す。み
種井と同。かた。あはやう。月。秋のふくすれ。尾花の波
もこわす。かとえゆす。波と。すと。もあからう。

梶井主二翁は親王家三首を詠じて秋合をとせし

浦月

あさたれとこのう波名ぬとて月小種々よれはすら枯る
床浦。殊御。聞と。要妙の原。あ。妙れ極と云も同。さてかよ
きゆ。妙の字を付す。あ。まと。寐。本れ本にひいて。本と

ソウ名のミソ。月の面白を、夜極めて觀る也

月在烟

月スもたらふらずはむわがアリモウタ。ねがアリ多
部^{ナカニ}さくねが浦^{ナカニ}モアレハシテモキモラシハ往^ス多
ね^{ナカニ}浦^{ナカニ}。奥^シ列^シ也月を^スとて烟^スこころ物^ス。アレハある
あまかればこそ月をハシケラ也。それも心ある^ハあまかば月
よ烟^スは^スとてヤダサヒ。烟^スを^スたは^スかう^スはいされ
セガモトモアマグ月^スとアラセ。又外の人^ス月^スと見てアラ
シ。あまが烟^スを^スうる^スよ。心^スあまかば烟^スを^スほ
き^ス。キモヒム^スと^スあらゆまん^スと^スよう^ス税^スもあハク

和秋所三首 海月

のせれうののうれしけみいをすくに月^スと見るよりて定めうぶつ
のせの海^スのあまのうけみいおとくとのくや^スと

のせの海^スのうみのうけみいや云ひくを定めうぶつ
うがのねうもくして^ス秋のアハナ^スとみ人のうすもくも^ス有^ス多^ス青^ス緋^ス
じこ首^スと^スあく。秋の布^スは^ス長^スと^スわ^スれ。月^スと見てアラシ^ス心
少^ス都^スてアド^スと本^スに^スりて^スう^スと^スう^スと定めうぶつ^ス也。
うけみい^スぬのうけと付^スる繩^ス也。が^スと^スい^スん^スと^ス繩^ス答^ス
うきハ^ス約^ス繩^スのう^スに^ス物^スを付^ス。波^スう^スけて^スく^ス。う^スと^ス

寺持院贈大だ家^スと 月似鏡

月新^スし信^ス小^スぞ移^ス二見深^スいばと^ス神代^スアキミ^スと^ス
月の宿^スうう^スて室^ス月と信^スア新^ス。アラス^スと^スつ^スと^ス
二見深^スを^スあそ^ス。倭娘^ス天照^ス大神^スの御^ス正^ス伴^ス八咫^ス鏡^スを^スり^ス
ゆ^スて。二見の浦^スト^スも^スと^ス。いま川^スは^ス築^ス堂^ス一^ス統^スも^ス。二
見^ス神代^スア^ス鏡^スと^スあらわ^ス。その方^スと^スは^スもう^ス鏡^スと^スば^スれ
が^ス神代^スの鏡^スと^スあらわ^ス。

彈正尹親王家六十首寄小

海邊月

りやく煙ひつきの神にもすゞめやくし
烟の月のそよよほまわうるにの烟をたつらあまへ乃
神はなふも月ひやすらじ。年どもまた。おゆせし。海邊月
とくろくわまの燈燐燐月はさもうれ恨てよりよせ結句
袖すらもかぬする月哉。一年の月ひやすらゆき。幸たまひま
とする月か也。

津手足あ坊かく済むた大納言すよぬせよまつ

浦月

部類云覺焉。是法師。新千載。新拾遺。新後無作者
月をかみそくをたつら。やしん。つ。我身とくと。やまひまくし
みうちき。我身をくとあるが。やかね。あまのあくを
ゆく。本故。伊物。我身とくと。へづくをくと。ひうけ。

贈太宰家少く

月並網を

月をかみそくのとまぐ。網引て羅波。海士。うわ。夷。い。よ。し
三津ハ排列。やう。い。そ。ハ。網を引車也。太宰の内。まだ。き。こ。る。あ
い。ま。だ。と。あ。ご。ど。の。す。ち。わ。す。れ。じ。ま。三。信。吉。の。津。字。あ。び。さ
の。す。け。れ。そ。う。う。ひ。う。行。人。志。は。あ。ざ。は。一。月。を。そ。う。け。ぬ
つ。そ。う。そ。月。ひ。う。そ。う。う。ま。ぎ。と。あ。み。を。引。ま。れ。り。よ
く。あ。ま。人。も。あ。ま。れ。れ。ゆ。な。也。

江月

住居の海やそのうえれくとみる。ぬうをとあら。月秋
小舟の古によ。凌とくと。雪うたく月の徳京。面白うと

二條入道大納言家少く　浦月

ち不本ほじうれ残金の月。教よあうどもあゆれ煙亭しん
煙亭の煙をあくたれせり也。残金へ残金のが也。あうとすの本
をひそむときた。又物よこつる幸をうけてよう。餘事也煙亭
とてこまねをく残金と。煙とあくた。煙よ月の墨うふ。うき
幸ゆ。おべーすとらでそれば。おまきのさうらめり。又烟とあら
を。こうかとよろ。松竹やあまたすが木さんすうをこうる思
ひよ立烟が後水拾言多羅。画てより画てまぞす。紫のあうづく
かうをけさんすうは徐昇門壁加。何ぞ本をこうと懲えとて云作
御よひまう。さん方をうかんと。烟をえみる。空そとくよひすま
みやすんと思ひゆうと。

贈た太行家少く月面首寄り仰よ　月幕無

月をとき後ふうげふれまうすか。あいさうふらむとひぐ火

月のやれと外のがくはくは演れとも。残べりと残すは。月のまん
幸れきとまゆ。きがのうれい残り也。いとうい。思ふるまよ。まよ
乃あくとくすも同く幸也。わといと通音也

海邊月

や人のほじう宿も秋のよひれあくびとて。下りやふくん
金浪のよする瀧さき。せきほくとあまのよすれの宿もほくす
後水拾言下。ひあくとく宿と寢ちあまかねば。れの夜は。夜よあく
がれて。すく宿をほくと。あくとこわくかとあくとんとせびに
いよく也

妙法院官月十五首寄合

鴻月

りごめ魚タ寄もとて。波すよりくあらう。まめのだら月うを
波まくうふゆ。小舟の波根こまいの。くく波な舟こまいの。あひす。一拾言田
伊和。伊和
物舟よ。波じそくをとてと。舟。夕舟の膳くわん。舟と。舟とくとせびに

浪まの小舟より。月のさうあらる風景面白し。よごい海也。奈へひ
ろき像也。渡津海一神武紀云釣魚於曲浦。よごの魚八十
枚小荷董。

古語

海上月

次

船も舟もあがーもみてあづがたもす。波をいづり月うき
あむなよ。八雲日。絶えとうきう。舟をの動ゆく也。徂渕氏。み
じくやがく。すまひて。是もよびへんせ。我かゆのすむ
がくよきわらへえど。ねふすもとくやれまし。是もあらうか也
えもきくとくをせりゆま。くわくよと舟の。揺籃不定たゆら。人九族。大波
え波もあくまくはるやまくよ。活まくちる白毛人九族。琴絃
音に引ひくく縛ゆるはるもくよ。かたまくちや。次。傳奇。山
朋からその風とくみたす。かくしれり。後拾え考玉。傳奇。山
き西は海より月のあらみ。浪まより。月の歩みがくせんば。又も登

湖色月

古語

うき。清き志。一ぐは。深き。沈み。うき。よよやかにて。ほく
月のある体をよく形容す

里月

うき。夜れ星のひうもみる。すきやけ。里の月。そよやけ。
時うきのやう川の雲うと。我住方のあま。すくよ。年
奇。や。経。は。岸や。れ。里。そ。よ。く。奇。た。う。ゆ。此。お。た。岸。全
内里をあさり。かくよ。移。う。英。の。里。は。明。く。こ。う。年
を。よ。ば。奇。へ。月。の。晴。る。夜。は。星。の。え。き。か。く。る。也。月。明。星。輪
鳴鶴南瓶赤壁賦。古文

古寺月

古寺かなく新もつれいなすかあとくれ秋の夜月
故郷よみこへ新とひ。あらのゑちよ池一月也。あらねをもと
ハ。ゑちのまきを參りより事れもびと孤あひれの川
みみときしゆくハ代主索良のゑちハ元興寺也。元亨釋書
云。元興寺者。上宮太子。討守屋時。模馬子。又誓醫寺於飛
鳥地始曰法興寺。後改焉。捨芥子云。元興寺。推吉天皇崇
峻天皇元年始造之。飛鳥寺。奉法興寺。大伴坂上郎女詠
元興寺之里。歌一首。古アカのあとういわいとまふづなれあ
す。松石マツシ一イチ六ロク奇キれむ。元興寺と月をそく。あ
リ。ゑち川エチガワ流こへ新もこのえ鳥の月。新シニめくらなや。
じとあくふぢりへ

妙義神主雜久よませ行ハシメ三首に

故郷月

雜久部類傳。風雅新千載。新拾遺。新後拾遺。新續古今作者
月をだよみこすすり里アシりあて。従弟アラタスうゑれ。新ハシメ乃ハシメうハシメ
里アシりあれて。従弟アラタスうゑハシメ。あよそハシメの月ハシメもくハシメすみほハシメり
あ。人ヒトとまなまハシメ。従弟アラタスうハシメ。里アシりあれて。人ヒトとまなまハシメ宿ハシメれ
や度ハシメもあハシメたも秋ハシメの秋ハシメ。なるハシメ。雨ハシメて。わう人ヒトとまなまハシメ我宿
を泊ハシメらハシメる。みうハシメ。さきハシメ。まきハシメ。行ハシメ。新ハシメ。まのまの寒ハシメ。公園ハシメを空ハシメる
じうりたうづハシメ。人ヒトとまなまハシメ。行ハシメ。新ハシメ。まのまの寒ハシメ。公園ハシメを空ハシメる

序子大納言家四季百首

かくう秋ハシメのあハシメ。かくう月ハシメの月ハシメ。かくう新ハシメの新ハシメ。
かくう月ハシメの月ハシメ。かくう新ハシメの新ハシメ。かくう月ハシメの月ハシメ。かくう新ハシメの新ハシメ。
刀ハシメ。刀ハシメ。刀ハシメ。刀ハシメ。刀ハシメ。刀ハシメ。刀ハシメ。刀ハシメ。刀ハシメ。刀ハシメ。刀ハシメ。

聖護院二翁親王家文一首

竹間月

そ枝うち月ハシメの月ハシメと行ハシメの月ハシメ。そ枝うち月ハシメの月ハシメはる夜ハシメ。

竹の小枝より月のすりとまも。窓よりうきひまほれ新月入る。而
白々一色也。方のうけはくに竹新もうつれひよてあり。され日の
木のまつりつらへうきれ面より新月ぞアソウねり。一ノハ百首 三
合もく一ノ日斜疎竹可窓影。正是幽人睡足時。題番室世間那
育千尋竹月落庭空影許長東坡月移花影上欄子王安石

月引庭花影上窓

許梅屋

花糸來替家ニ索ゆく

閑月を

わきすむり代より被れ園の戸へ根氣すくとてまた来りしむ
活けらせよれど。園の戸へほしき。月のうとめよれ。又被れ園
乃被ゑ下とれて月れすうふぞあらせへり。団扇団扇詞 雜上此叶行格也

贈た大老家こそ 九月ナニ夜を

石まくまくに代の長れ林も。一月も名すやこすい成し
上古天下降りて。明くうたる代より月も明くうたる成しが。よし
よし

鏡て明くうなる。今夜のそかくも。也。五郎公の前され。が
せせやうそよろく夕月す。やまと英の月。うせひかくして。明
うすうすおなれよ。や。名みれりふと頬。瑠璃とくふとおくる也

月前歌

力報ひあく便り。りく室の戸より。かかとあがと。きのまくらん

よもすぐ力の力。うかうからゆ。づく明るく。もとれ。か。何を

あくべよ。月くとあくべ。もくはやくとあくべ

讀放ち孝和詩とくと竹月 里月

郭穎云立信ふ田讀放詩。宣尚が情治久男。新千載

新拾遺作者

月くくともかくもひくや。おじみれ里にとたてく林を。つむぐん
我かかくさかうのひくじか。や。を。ごととよ。熙月を。こ。く。あ
あくべかねつと。や。れ。も。さ。く。じ。ま。の。あ。れ。が。こ。そ。え。

高麗上

新拾

行の里た。秋の衣もまたも堪忍してほんとせ。ましも我の
かくみゆきとてかく度よこむ。かくもじ七首は月を委

贈た太長家ゆく 月を繕を

秋の衣はふとあれ本のひよとやまともわざを月をうる
繕もく伏めの床れぬをすくらむとねうのらむと
ぐれお車事 伏繕のほい何とあるとあらず。ほくちてねむこと
あづ。我も月をうてすくらねれがんとせ。下向をす
すくわなびと月をは。座くらねまこと。うつてすくはせ
めぞうわと思ふをいづくに極て明とん人をさう
きをね 秋の衣をひきと朝うせ。月のれすせ。まきを

田家月

ウの門のまき田のあがはり、道の病もく床の月をみるれ
稻道。稻のまきとをつるむすく走。又田の稻のどくうれ

かうとまき。苔のうれ類也袖半押。顯昭えり称さぐとそ
あまう道をりふじとひまくス稻をしりよもあけめゆま
又稻のどとのわくするは。道はあまう小糸さればまび外水
下れ草を。水中の石を。稻のあり難用。剣かこの豆ひつ
きつむりろまきてと人を見るよしも人を方射 これへまくと
川の風の吹くとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
外音れおくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくと
田上月西まほ いの稻の道よ仰るや。世をへまくしろの方や。田家
の田のまき田を叫あげ。稻道をまくと。まけと床の月
をくらむ。稻とふ稻とくとく

弟もひく田面は病ふ稻とてまくとてまくとてまくとて
田のあよ新のうつたるふ。稻のまくすれば。娘かととりて
點をくらむ。稻のまくは。稻のうじきをくらむ。また

仰さうや田上石すが

獨吟百首小

秋日秋のめぐらすれどもとむらを神神あつゆ、月月のうけよ
のうかのこまかうむかうあひ。うみるともうまかう、ものかくも
袖袖へ月月はうづるひとよそひあれりうつうよともかく也。天智
の帝天てうづくより

民歌家七首一月

月月はうづくうきうき方方は友友と家家ようう物物せりし神神あづる月月うき
月月はうづくねむく。物物せりしめぐらすくじやと。月月はうづく
少少く別別れて又又まも成成や桐桐い今今てぬよひの秋秋神神あづる
月月はうづくわざくわざくが不不なり。ハセ吉彦五

不衛光寺庵室ノ人人まくすききよ

野野往往月

病病ふかをののおれををまよよりも神神あまアマののうげうげよ
病病ふかののおれををまよよりも神神あまアマののうげうげよ
源等是是とそすくににがはなざはなざれとののはぢはぢにそくくじじりり
生生ままよよあまアマのの秋秋ののうう書書。生生ままよよあまアマののうう書書
草草無無にに神神あまアマよよどどみみるる病病よよ月月はうづくよよ。

伴伴也

え盛え盛盛ととして住住のの中中能能れ力力ををうけけよよ

郭郭類類云云。紀紀え盛盛傳傳。新續古今作者

ちち出出ばばののももややははれれのの本本ひひよよれれのの月月。

けけねのの木木ひひよよ月月アアれれるる月月。ああくくととひひ。かかはは海海
言言ののくくととななままさされれよ。ほほとと此此系系とと思思ひひもも。か
がが流流わわききやや流流ととししけけよ。かかててととももまま内内。

儀にて落がう終きまの樹よびうらやみ。御ひるまわ乃
仰なまや。ぬかうれそのつた事は。はな自よ。いろのは。が
ふ幸ひす。いだよてく。面白うう。と。思ひゆ。と。眼蓋
の病よ。よを思ひてと。思ひ。じゆれまと。めぐあ。と。も。う。と
つ。病。が。行。常。に。禱。り。音。を。く。り。く。吟。詠。せ。ん。せ。ん
一首。の。可。れ。か。く。い。う。ふ。幸。有。妙。く。玉。ま。く。く。う。う。と。も
毛。そ。ざ。た。の。毛。を。梅。う。花。う。く。く。財。ひ。と。も。よ。ど。ん。古。春。後。人。不。知。
よ。り。い。森。う。ハ。千。代。よ。う。う。と。も。う。と。も。思。ひ。身。う。う。と。も
そ。づ。く。花。の。昔。に。あ。い。と。は。思。ひ。身。う。う。と。も。思。
ひ。の。身。う。う。と。も。う。と。も。思。ひ。身。う。う。と。も。思。
そ。づ。く。花。の。昔。に。あ。い。と。は。思。ひ。身。う。う。と。も。思。
ひ。の。身。う。う。と。も。う。と。も。思。ひ。身。う。う。と。も。思。
え。れ。す。と。と。も。う。と。も。思。ひ。身。う。う。と。も。思。ひ。身。う。う。と。も。
思。ひ。身。う。う。と。も。う。と。も。思。ひ。身。う。う。と。も。思。ひ。身。う。う。と。も。

田。あ。う。う。か。う。き。や。う。ら。う。ん。や。幸。本。

たまつ作和義即下家少く一月を

キ。ど。と。も。な。ぐ。り。ち。と。と。ア。か。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。
我。ム。ナ。グ。ア。ナ。カ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。ナ。
ナ。
日。月。大。梵。身。而。教。化。之。モットモ悲花經第六
菩薩接記品又。釋迦五百。大。願。圓。之。
は。ム。を。づ。く。そ。も。も。か。う。く。レ。ル。ノ。く。ぐ。る。ハ。さ。れ。が。く。也。た。く。う。う。
食。を。欲。を。ど。す。う。ふ。そ。ぐ。と。そ。よ。い。た。す。非。き。そ。も。し。れ。較。
お。い。お。先。の。場。と。結。て。云。頬。之。身。よ。う。な。年。出。そ。そ。本。す。な。ど。
身。を。ほ。一。枚。の。み。さ。と。月。花。を。見。飲。食。を。す。う。と。わ。思。い

をほきくす物とするをなくせむと云也。物もいとなく
ひづくを初也。人をさぐらうとも同一候也。漢より慰勞
と云ひ也。其のぶへそらざま也。剣がんもあぐへたる
ちぐさらへたるもあんたぬあまでお一巻万十巻をアリ承
ひもくに何さんよアントモふりやくはなぐれ後金承室
蟬セミがかきをよけもさくさく渾身ウツジンのふ烟スモークを信教傳延古良
さくさく音オノみやども。物やかくまじタマシマジあくさくふすやど。志
のひてあ絶ゼルせうスル。美卷ヒナヅチか不可ハシマズ勝カタマリ

入道布大政大臣家三首

曉更月

金キラきがあるを病クモリめを於入アガの刀タケをさやけま
曉アサヒ霧アザマ。曉アサヒの月アマツで薄アマシ、重アマシ。夕ハヤシ。朝アマツ同シ
曉文アサヒモノ射アサヒシテ。暁アサヒの月アマツははくらるる。朝アマツのうけり
暁アサヒに合ハマリて。づよく入方アガフのまやけマヤケだ。わひいよく也。

二條大納言小義大納言アシハシはうひて難ハラカ力ハラカよ

くうそえ首歌アシハシよます

海上曉月

原ハラづる聲ハラシマツルをひくふみゆハラシマツル。月アマツぞかくアマツあきこ
難ハラカい西アマツひくふみゆハラシマツル。月アマツハ海アシマツ入アガフ也。八方ハチカウの月アマツ西アシマツ海
乃ハナよ近アマツく城アシマツ。方ハチカウのえアマツよく海アシマツ。宿アシマツくいふくよきう
合ハマリ。彼アシマツとまくうなて。日アシマツに宿アシマツと一色アシマツなり。青アシマツ色アシマツ。

あくはうい宿アシマツやくつる也。古文後集アシマツ王閣序アシマツの秋水共アシマツ
長天一色アシマツ。詩格三乾坤浮水アシマツ水浮空アシマツ。同三水似晴天アシマツ天似水
雨重星アシマツ點碧琉璃アシマツ。新後拾遺アシマツ後人不知水アシマツやをとす。水
水アシマツりぬアシマツ。かよひて津アシマツれの東アシマツ方アシマツ袋アシマツ双アシマツ綫アシマツ。もあくらり
合ハマリ。水アシマツ。古老的アシマツ。水アシマツの海アシマツ。空アシマツのまよ。海アシマツ。水アシマツ。入アガフ。とあく。汗アシマツ。汗アシマツ。

は白波アシマツ。食アシマツ。此アシマツ。入アガフ。日アシマツ。伴アシマツ。年アシマツ合ハマリ。

ア

民部卿家八月十五夜十五首一、故に弦月

雲のあきてらざらざるれか紙シナガ小うすは無け候そのことふ
住人トコリあくあれら里されはほらすよめとくじくろ物
前ハシメり在リ引ハシメ共ハシメに但ダツ有テ雞犬不ハシメ車馬聲ハシメ第六
水自ハシメ渾ハシメ日自斜盡ハシメ無雞犬有テ啼鶴千村萬落如寒
食不見人烟空見花ハシメ中韓屋ハシメ丹詩ハシメ候ハシメもまたハシメ甚ハシメ

併ハシメ也

門子ハシメ入道大納言ハシメあゆく 月前旁

ふみたがハシメまとハシメ月小弓ハシメのわうやう葉生ハシメ
夕ハシメ月ハシメをハシメして。終ハシメあく朝ハシメたく。これハシメからハシメくハシメと
そんハシメわハシメじすよをハシメりきのびハシメくらす。さくハシメすハシメあくハシメぬ
あハシメい。そも年ハシメばとハシメたもとハシメそり明ハシメる。ひうハシメうハシメるハシメあ

わうハシメ月ハシメを今ハシメ奉ハシメ秋ハシメの月ハシメを今ハシメ月ハシメのすハシメもとハシメこ
おハシメげがハシメあくハシメも!

長考ハシメ歌ハシメと 暁ハシメ月ハシメ歌ハシメ空ハシメ

月氣ハシメはうハシメだめハシメと物ハシメをそれハシメの裏ハシメ小ハシメをぞハシメき
よハシメすぐハシメ月ハシメをえハシメうハシメてハシメかよハシメくハシメれ氣ハシメ人ハシメれくハシメ有
やハシメとハシメて。そきハシメの巻ハシメよハシメれハシメくハシメがハシメくハシメしハシメる。うううう
名残ハシメれハシメくハシメ。暁ハシメ月ハシメそハシメもくハシメのうハシメとハシメりハシメくハシメ下ハシメ

彈正親王家立首 暁ハシメ月

入ハシメれ歲ハシメの本ハシメは紙ハシメり月ハシメぞハシメうばくハシメうぎハシメなりハシメす
都ハシメのまよりハシメうくる月ハシメの経ハシメなれべかづくハシメの秋ハシメまにハシメ古
入ハシメ方ハシメすハシメの月ハシメ。おハシメまハシメてハシメやハシメくハシメちハシメ。本ハシメのまより
いづくハシメは儀ハシメ教ハシメもハシメふ。是ハシメへ入ハシメ方ハシメの西ハシメア歲ハシメをうりハシメか
あハシメくハシメけハシメりハシメきハシメとハシメ。かくハシメはうハシメいハシメとハシメ。

かまうとひ。一説くやなぞして。あつまふのまにひく。
ほへぬへまくはそもひで。ひきくすかの處そぞ本れまし
えゆうゆく。霄より波く。ひそづく。あくらうるく。かく
しづかうとひ。曉月暫見牛樹裏三井詩 邑山中引合みくべ

賛た大長家五首小

朝參

八まで月もくろでゆる東の、そりうすみねすれまう
月をそよん。へゆるまどいそりまくとそと月りへ。夜を
明りゆがめ。月の入へ岩よ草よ草よみて。明ぐれの空よ。ひと
くくさる。秋葉アリ体。さくく形容。すく。空ようじよ。かく
の月也。月よはくのりと夕くのりと。明るえをひそんとまく入
まとそはくち成

河夢

ほくろ本れあうとくまておれ。と空ようじよまくの川よ

序ふた丈納言家かく 渡旁を

すくまくうとうとくみひづり。とくみくみくみくれゆく
船舟とくら。郭城と泉川川とひ。を遠み。とくら。泉川川と
木津川木の事事也。崇神天皇。武埴安彦安彦といひ。の詩詩也。
木津川木とひ。日本紀日本紀とひ。はよいづ川川とあやまつて
いつくとす。あくらうも海うのをも。たおれきて。とくら。とくら
よくく。え海うれ向向も。とくら。とくら。とくら

田上夢

夕ゆそとこづれりとくじゆく。とくら。とくら。とくら。とくら。とくら。

林のふは。とほり鳥は。す。の路の儀。す。小。し。あ。れ。く。ても。
村。く。あ。う。そ。う。ひ。夕。日。の。移。へ。き。つ。て。も。田。ア。播。キ。モ。ま。え
く。旁。向。よ。う。と。ゆ。り。ね。ア。と。草。の。あ。せ。朝。明。く。の。川。よ。う。
絶。く。に。移。れ。ま。う。さ。れ。無。介。木。主。を。の。き。よ。う。あ。う。

清。み。た。大。納。三。家。四。季。百。首。よ。

ひ。う。で。だ。ふ。れ。れ。り。新。ア。旅。か。れ。小。寺。か。立。こ。か。く。書。ふ。や。う。お
ら。か。ず。と。と。書。や。す。た。れ。か。る。一。じ。う。い。寺。の。ま。う。し。る。ゆ。く。
の。く。く。と。が。か。く。寺。く。な。く。

民。部。八。家。八。月。十。八。夜。十。又。首。よ。 湖。上。社。旁。

高。さ。う。と。と。の。れ。と。の。じ。ま。よ。り。く。と。と。い。と。と。海。土。れ。ば。う。か
一。本。結。う。に。ま。う。少。と。と。田。近。江。也。高。う。と。さ。方。と。う。あ。そ。
照。向。ア。冲。ま。ま。の。お。じ。う。と。と。い。と。と。火。火。火。火。火。火。火。火。火。火。
約。あ。も。い。ま。う。だ。て。ゆ。れ。也。ア。も。う。と。と。い。と。と。火
約。あ。も。い。ま。う。だ。て。ゆ。れ。也。ア。も。う。と。と。い。と。と。火

を。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

人。こ。代。見。ま。う。か。り。す。奇。す。見。け。留。ふ。番。ふ。霧。

ア。と。

四。箇。く。う。れ。り。く。ふ。一。と。教。人。事。レ。ハ。う。る。ぶ。う。と。う。ハ。使。え。ノ

里。の。名。を。と。き。の。や。一。

桂。後。傳。

拾。上。

化。見。の。よ。す。と。と。う。と。と。う。と。と。う。と。と。う。と。と。う。と。と。う。と。

と。

と。

と。

と。

と。

と。

川。霧。

の。手。

すを川あき方ねりて 亭あくやすやとみかばうれ
外あくおりのど車とりへおも我らよりウカサセ伊
墨田川モトタガワもよむ候マツシテの詞ハシマ長ロク。豊ヨコシマ。墨田川モトタガワもゆれとす
ふ。一、波ハ一宇スル。何ナシにすすやすすすまくらかの朝
空アカのふくらはばく。おばいごとそ。ひづるよびゆく
まくわ朝アサヒの音ノミ満ミツをゆかせ

民歌四十首に

サクシム

よ川のあくねアカニまくはまくす。山ヤマ小コトハのつる秋アキ志シわきまう
水ミズアラキめくアラキ。あれす也隨風ソラフジ神代ミタケ隨意ソリイ万マツ國クニもまう
く。れゆくアラキくとくくれ。よしよまともちく盛ヨシヨシ下シタ吉春ヨシハル御美方ミタケ
やさか林ヨシハラのまゆ。有アリ。相シマツあら水ミズの流フミ。済シマツれど
れども作ハシマツを庵アツメ。仰アツメのひのくす。すく作ハシマツ也

浦シマツ

夕ハシマツねまうたの涙ハラシマツやまう。人ヒトの涙ハラシマツとまう。あがまの浦シマツ
玉タマの玉タマはねまう。亭スルのまがたとひく。八ハチ九クシと
よとおせまうきの色シマツ。草ハラシマツれ。ハハよまく。うそウソとせじ
よしはのくよまう。江エマれ。津シマツとア入ハシマツて。ばくとの波ハラシマツく。よしの
色シマツアラキアラキすとくよく。離鴻ハラハラ。奥列ハシマツ塩シマツ電ハシマツ浦シマツ。一卒此
浦シマツ亭スルの題シマツもすもすハシマツ。

民歌四十首一卒に

書シマツきて相シマツとけす

秋ハシマツの夜ハラシマツ。雨ハラシマツ。西ハシマツ。北ハラシマツ。
秋ハシマツの夜ハラシマツ。雨ハラシマツ。北ハラシマツ。中ハラシマツ。

秋ハシマツ。夜ハラシマツ。

秋ハシマツの夜ハラシマツ。雨ハラシマツ。北ハラシマツ。中ハラシマツ。
秋ハシマツの夜ハラシマツ。雨ハラシマツ。北ハラシマツ。中ハラシマツ。

終の利れつとすく限る。また、うそづかずかわら
がまうともちく唄す。ど。霞むのあは、歌ひをふもむかしれぬ
す。歌もとめり。西よりかくさくとれぬ。歌もひき
かくせぬ。一幸この句つまにあかんとす。

二條大納言家三首
獨吟百首
野鷦

意主てうつむかくめうとまみれいとのをね。歌ひよす
まじへと傳せ。しめうど御卿よ。紫田小所。有。新とよし三
八ふ一幸ふもとれとす。

獨吟百首

尾花たらりいのとゆせふうづの本やよし成しと
尾花たらりはかれむ。うはくねほづとおきたちと
成りはす。前篇
うさまで多ふしけづやわがひづくろひゆとむむと
はとあく。蘇姫草。唐草。草木也。鶯頭草。青花^{花詩}と
いふるもと。無名。弓弓
うつむかく。うらむと云ふ。ままだ衣ひもとと相寄
うぐれでのはくううへぬも。世中の人のひがたうけ
うううひやまとひとせきりきうち。青花緑葉上疎蘿。牛
格^{花詩}。槿うれし。月華のうよ笑ひ。すく。すくのうけうから
ある。ちむれく。也

二條入道大納言長樂まひふ所。よ人くまひて秋
合とく。は。 機衣

長樂寺。拾芥抄云。十一面。或云准提。宇多院御時对
林寺。北。祇園東

里人へえくらかくも。うきせとふのよひや。よじかうと
おき新後拾遺杖下よ入。法賀樂。近江也。持衣とすく。衣と

宿はとて安寝とをもひやうへり。外ふ。物物す。

彈心宮三首

只前榜衣

色うるむまくわらび。がくまくよのふ。かくまく。まくまく
みくに。霧つづく。外ふ。なま。まれ。うる。色白。てうる。まく
うる。ばく。長く。ほく。からく。古事。あき。あく。くじけ。う。事。れ。まの
ふく。色付。は。外と。う月の。ちた。花く。衣。か。音。を。固。も。まく
たり。八月九月正長夜。千聲萬聲無止時。白山朗詠 南樓月

下擣寒衣同白氏 已近苦寒月。況經長別心

擣衣

杜甫

左未の仇和葉抄ト

家三首。榜衣

秋の葉ふあくまく。枯風の吹ふほりて。や。音。成。ふ。と。
枯風の吹ふ。付。く。生。ま。る。それ。秋の葉。すば。あ。り。て。ま。は。中勢
秋の葉。成。ふ。と。生。ま。る。そ。う。音。成。す
は。く。と。

聖後院二示親王唐昌太用

用

里の。あきて。れ。せ。い。と。う。用
い。ど。う。た。ハ。せ。は。る。の。葉。休。見。り。里。れ。葉。ま。く。れ。下
は。度。で。ふ。葉。の。休。見。の。里。れ。秋。ま。ん。葉。ま。く。れ。い。と。葉
う。音。を。ま。く。ば。ま。く。べ。し。葉。休。見。大。和。袖。中。お。す。あ
誰。家。思。婦。秋。擣。衣。月。苦。風。淒。砧。杵。悲。明。詠。例。國。は。あ。て。月
や。あ。く。と。悩。て。も。そ。れ。済。ち。て。安。く。う。と。新。古。秋。計。令。主。と。し

彈心親王家五十首。榜衣

妹。に。天。ひ。ま。ま。下。う。あ。い。と。ゆ。い。も。れ。み。う。の。こ。ま。う。う。あ。い。
此。奇。新。牛。載。竹。入。く。ま。ま。共。く。と。日。主。く。大。伴。の。み。う。竹。溪。
ね。ま。ま。い。う。ん。山上懷良互 新。古。絃。列。竹。く。吹。風。を。み。か。衣。杰。清。そ
了。あ。く。お。ぞ。み。さ。新。古。秋。下 例。く。と。う。の。絃。人。情。も。じ。て。新。竹。月
う。衣。お。ぞ。拾。秋。下。新。古。秋。 亦。知。成。一。不。返。秋。至。竹。清。砧。已。近。苦。寒。月。新。古。秋。

經長別心寧
空外音杜撰 長安一片月 萬戶撫衣聲。秋風吹不盡總
是玉閨情。何日平胡虜。良人罷遠征古文前集 人を待はませば
すくもして、衣をあわさひ。ば幸す。又詩も吟合ひて

月夜撫衣

えりやで詠歌續て月もりこじんほりアラウモトウアリ
月のとすまう月絃と人月つひて衣をこそをまと人毛万一
於京三 幸奇に月絃といじて君をまう。宵がまたうべ。夜深く
月も生すゆ。衣をすまひこひそ。人を待た。かすかう詩も引

令子一

撫衣金蓮音 てあまを待た撫衣一章

まろ人ひうはひちうひつあう
御事はをよきのうひ

まのうひうはひちうひつあう
ま首マツシタ てくぐな
カテ。ま後マタタク て
みをミヲ す。まへ撫衣マハヒ 事マサニ て。まへて衣をすくんマス せきやくへら
ふりうたはなマハシタハナ まほへ。まくもあたうり衣。春マツツ すの
中マツコ とえりは

秋れすりゆ

寝ましきみのまほうりてようと都マダラ と衣うりかう
跡マサニ りあきと成りなとるの草マツシタ もくすまマクシマ され
を幸マハシタ にて。あがこのゑれきとまおうひきマハシタ まほマハシタ 秋マツツ
そ吹マハシタ 撫衣マハヒ 美秋マツツ 痴マタタク て。まほきとまもう祐マハシタ まうつり
まうつり。まどうりて。まうつり。まほマハシタ の秋マツツ 鮎マハシタ 梅マツシタ のみ
ごくもすく。まね候人マハシタ とも。そすうをととくとく

はくのあうて。まく衣をもとよひて、衣をあまて也。おれり
うそあらひてよう

接衣曲

いふしてせうほんとと差トリとさくされまハモラウスルを
接衣の音のさうにてこそ。差々を経うすも。差々はゆ
き。ほんともとく。砧のうちたるふ。ひそひそ差々をば
うのゆみれうへそぞうねり。差々いくも。波とくらうす
ひそひそ。根本差々はだくにまきわされど。割中には
轍くらひ。差々とおうう事をいふと。ばくらうす差
よひくも。ゆき。やくもゆかと。詞をまうけ。だくしてくが
す。すり。ふ。世寄。か。き。音れかたちなう事と。まくと
差々り。まく。おれじ。くらうすと。じく。面白本奇丸
かね

御子た太翁言葉

接衣

秋ももとせんと吹です。人をまくはまく。小衣うらう
御子によがく。吹く。はまく。おもむく。まく。砧のうち
御子を吹風。まく。おもむく。おもむく。まく。砧のうち
鳴く。まく。おもむく。君をもどもさまく。まく。砧のうち
衣をあせ。まく。まく。あり。あく。まく。まく。まく。まく。まく。
やまく。衣をあせ。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

里接衣

ねう衣へれく。まく。里人もまく。やまく。れ。音紙。まく。
里人。秋う衣。まく。砧のうち。差々を。経う。それで。まく。まく。砧と
まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。まく。

脚体井。宮みて。接衣

おひさした國つゝき夜の國れども年をうすり
まゆの林風のをまく國でさくらひ。國乃まくは衣を
すたり西向。こまくと一本アリハ貴わる衣うつそまく。國乃
えれこれ人もス衣をうるせ

夕榜衣

詠をまう富もふねはらすよくまもんのうるをすり
砧ハサカクは人待はまうらあうる。ばまうらあうるの富すハ
えれをせりき停はもあくまよ。うれい衣をあまよくなすり
例黒ひあれて月やあくと忙てもあれ能ぢよ衣打んはまむ能
吟し合ひへ

家榜衣

歌もハ本年まほり。歌もせはよじきゆくよ衣うつそり
く絆れ小石また少羽衣もと秋もとま夜ア衣うつそり
や秋の衣紫。月をと本年まほり。歌も音も。衣も音も。歌も音も
とま。

二條大紙言家月次文首 日本榜衣

おまう年月より外ふとじ人アラリとまくきておまうと
あれうはうの宿よ。月のとすとそ人ひあくとせへだ。往
人ともそ。衣うつそり。歌と儀をうそり。よ

闕伽井宮月十首よ サヌト

きうそと月小秋も衣とたかえさあれあうせうそり。すと
我の月を説くと。すとすと。わざとを。何と。と砧のまく
れをうす本と。うそり。月を説くと。とそのまく。まく
例うそり。また。衣うつそり。のすとみ。麻のと衣うつそり。せうそり

山名

序子左大納言家十六首

秋月は衣月とす。秋月は衣月とす。秋月は衣月とす。
君の衣をうへてすりうち衣とす。月をうへてす
うへ月をうへてすりうち衣とす。月をうへてす
まく也

花山院入道大納言家小く 遠村撫衣

煙不のうふみゆくとす。小きは風をうむくとす。うゆ
をすされは烟もかのうれをす。ス砧ノ音をもゆそせ
まくとす。縁よもう。まく村のえり侍。わそひまく也

二條入道大納言家能波八首小 海色撫衣

あすれもしのうの風。小音とす。波す。外ふるしきもうね
流のあすれ。あすれ。うらす。うら波。風す。ばかく砧と。音がす。そ
あすれんや。音をす。うらす。うら波。縁よもう

むすし公そ

風とす。かのまがくと音とす。あやもひくふくらまつま
哉。れむくとれては。はのふけ。そもあくと冬にまく。う
風す。吹ゆ。哉。れむくと。うや。あくと。ふくらまつま
う。と。小丘。かくと。かくと。まちくと。也

里撫衣

黒ごく衣ううう。秋なうう。夏うう。まのハたきしと。ざん
黒ごく衣をきて。秋うう。めと。うけまへ。もれ一人と。と。あ
蔓をたの。ねる。の。や。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

やくはるか里をもときて、みよせひすれ方の衣うりあう
水邊瀬より。ほむね波の山洞の地也。又上代惟喬親王アミヌ
布一車。伊勢守信のあつて。さちきだよまふとく。里あつとも
あられぬやまくと。身方れきだれば、いづれにまわつて
あらざらと。衣うつまんで、まれあつて、わづとくのまのま
らさと。武をきて、もと者へめうきうまはみゆの秋乃

八月 降親王

夜持衣

あくやへよくか夜をじれぬまよたううらまゆる
あまのあまは、別て、まだよむゆよりうて、おもがすから
夜よ。舟人あわば、うき、やまきをもひます。あらぐ、衣をす
まよく。散極の秋みとく。れもなまく。空のあぐれよ
まよく。宿のまよもよ。船もあもとまくとき

とくや、船もよしわざのやあわが衣をすまよし
とくい外のよし。船もよし。秋公像ハ大和也。外ふをもく。もの
とくまきうもやとく。をうきをすまハまだく行う。也神中 何社
ものよむたとく。をすまつて、をすまひよ。七日ひよ。也若狭 龍車
はかこの里九そくまく。ものよむた。參らうととの床か後室 佐治三
もの外ふの尾りまきまはれと。毎朝くもすまよ。夜とす
秋ものやものとしけたり

あよた大納戸家ゆく 異

よくらば、あくとよく人萬のえもとうほひをみてみよもと
あも言秋よめて、ひをく成て、またよもよつはせよあく
萬のえもとうほひをみて、ひをくとひくとひくわく、あく
よもよみれて、たのううううと思ひやく。心もをきよもと
よもよみ。さん方をみて、ひをくとひくとひくわく

云何也。春月之未也。

芳實白家かくわかんを

うとくこくのうへ菊れまぐたあまも多種れむくろまご
熱ぬるじて秋叶の若葉。ふ絶万忍ぬくまくよ望す解わかて。菊葉の
絶葉きりは向うすく。又落おちも有濃こなも希きも。色こなうはるて。
此菊の一色いろも多種しゆの花はなこなうまへ。をくろたれくゆ
とひう。急かく秋あきれ菊きくを。一年か二交こうよりよだへそ
それされ秋あきて時ときを。され菊きくの花はなこなうみ
に色いろのまさんばばばばくわの公こうとちゑ。

漢下津安月次三首 月菊

長月れ玉扇ぎょくせんの月つきれ安やすをそしめうらへふきくきくをれあく菊

乍さまんとそくづくは月つきれ在明ざいめいの月つきを。やまつまつががを
キキのゆゆと。えとく金かなねて。従つうり。と日ひ月つきの比ひより在明ざいめいの

を。萬葉秋あきりけく。うと。是これのうと。が。花はなのを。のうと
ひ。も。秋あきれじゆま。うと。ひ。よ。うと。と。こ。よ。何なんれ。れ。ひ。ふ
か。り。往むか。又。月つきの。さ。行ゆ。よ。うと。と。云。保ほ。を。う。け。て。よ。う。も。有

景太政太卿けいだいせいたけいを。あ。か。く 菊きく。難むず。月

うと。うと。秋あきの。うと。うと。月つきの。も。れ。照てす。ゆ。く。花はなの。うと。うと
うと。うと。色いろの。うと。うと。月つきの。も。れ。照てす。ゆ。く。花はなの。うと。うと
うと。うと。み。うと。ゆ。と。花はなの。月つきを。お。し。う。せ。れ。ひ。ま。だ。う。つ。と
洋ひ子こを。大。卿けい。を。あ。か。く 菊きく。難むず。月

を。れ。面おもて。あ。う。う。の。葉はれ。こ。じ。う。も。う。き。あ。く。か。く。へ。裏うしろ。の。う
こ。紫むらさき。ハ。濃こな。葉は。也。色いろ。の。こ。ま。也。山さん。の。神かみ。と。う。り。山さん。の。こ。ま。夜よ。の
色いろ。も。う。れ。と。思おも。君きみ。こ。だ。ね。ね。と。モ。ア。ド。こ。ま。秋あき。と。ゆ。い
よ。秋あき。と。ゆ。い。四。古。老。菊きくの。を。れ。う。う。と。ば。書か。と。ゆ。と。菊きく。が。す
る。月つき。ば。つ。う。移うつ。と。晝。色いろ。を。れ。と。く。そ。ば。上。あ。が。う。壁かべ。の。え

さくやまくべき程。たゞいあひそくとも。枯びて有へ紫す。も
面白きとす。たかうどく。枯かぞいかれば。てゆみうちかま
我身をうそとあらわす。されど。あまのあらわし。かく。
川水かけまつり。とくかれ。なぞうの一長短人。み明淡
中經三寶傳
千松上 岩手
うづくわうと。玉森のね白菊。こみすうせたり。は捨松下
平希世 菊の
花あまうる。わくみ。こまはく。津々也。此二首何
秋の葉を。一年に。すくい。自よ。たゞそぞれ。後金本
古松下 一二首何
もをのひきうて。せうよ。めうき。と。もう。葉も。さくらんづるを
ひそ。こだうく。すれ。枯の葉。外上。それの葉のとく。スうづく。そ
れ。葉。多く。ゆく。也。

贈太丈五首。菊

左。書いふ。かく。と。考。代。下。かく。長月。れ。あくま。、かく。花
秋。む。と。都。かく。之。太。戴。礼。よ。露。結。焉。霜。と。云。と。秋。む。冬

よう。う。ひ。じ。ま。ま。つ。く。か。ゆ。か。の。冰。く。そ。あ。と。か。字。延。ち。か。の
公。た。の。を。つ。ね。う。か。ゆ。も。菊。は。種。盛。う。て。長。月。の。内。か。う。色
の。ま。く。よ。ひ。う。じ。天。う。代。の。も。ま。く。よ。く。と。せ。考。あ。や。り。秋。か。の。事。年。を
と。う。け。で。祝。う。し。れ。は。と。と。之。又。云。考。あ。や。り。秋。か。の。事。年。を
えて。一。年。の。事。之。里。霜。も。云。類。ゆ。て。年。月。の。移。う。ふ。も。有。つ
君。う。代。の。も。ま。と。う。け。う。ま。く。ゆ。け。今。を。考。あ。お。其。様。う。だ。う
ら。一。小。む。れ。あ。あ。よ。ね。れ。て。と。ひ。ん。さ。よ。ひ。う。く。も。後金本
古松上 式。昭。に。あ
考。と。秋。の。病。を。ま。く。つ。う。考。結。て。あ。く。成。く。云。事。有。か。く。と
定。家。は。云。他。内。は。考。あ。も。ひ。ま。く。つ。ゆ。か。く。ト。す。考。訓。み。り。考。と
ある。各。別。う。と。お。も。あ。ま。く。幽。齊。詠。歌。大。概。抄。よ。あ。う。り。筆。あ。ぐ。る
よ。詩。注。兼。荷。云。兼。荷。蒼。々。白。露。為。霜。

金蓮寺。あく。ひ。秋。雨。を。

生とすが田を不まひなれ袖をぬへたらしくか。ほもす
秋の田を神をかゝるといふうそぞやもく。古長アラシ袖をかゝり
野をよまつせてちくとすうや。妹の香り潤也。少めは晴くも
うらもわれり袖をわざす。潤の香と。それまく。わざくさ
じまことたれど一向の香よがすらうまうらじゆを。中
の申あそばれ春西ノム

後大原野アラシノマサキ

ゑんぐねねふくとせをくわふれまとよてほほくさくし
ねううくはきそかりす。隣もたく。おひねうの内
ゑされく。外の空あはう本とそくとまく。そくはくさく。下
かくす。すんり下かせづとまとのけい。ねはねきとほあう
思ひと外の心事は今本からとまて満をすとくとまく
在りてよむを

秋田

ぬれしみて田面に雪のまきはもとれり。もとをとゆる。
田をひりゆへ田上の稲葉のモハカタナリ。わざる稲を
ほりそそぎ。そはれまくとすうや。それく晚稲カクテす
秋の田のまきはもづくとすうや。わざくとまのよまじめん

雅成聲

候古松

候れ羽

古羅下

候れ羽

シタリサヌセヨウカチニトモドクニトシテハナシト
タガセアシキを

シトヒシトスケウシヤソニテアシツアサシテ
シタリサヌセヨウカチニトモドクニトシテハナシト
タガセアシキを

シ富ムシミホトマシトモシカシテシテハナシト
タガセアシキを

シテノシタリシナシナシ

シタリサヌセヨウカチニトモドクニトシテハナシト
タガセアシキを

三

山中集

シタリサヌセヨウカチニトモドクニトシテハナシト
タガセアシキを

シタリサヌセヨウカチニトモドクニトシテハナシト
タガセアシキを

時々は里をまよひ、ふと見ゆる所へ入れば、始めて見るものか。すたゞく
うるまなれば、ほんの少しあつてもかく、そむかしくて見ゆる所へ入れば、
里をとづく。かくもかくも、下るよ跡もとすこくとすこくとすこく
例
かくもかくも里をとづく。のえがゆゑをとづく。まわせねむ寂さ
ゆりやしがゆる。里をとづく。されば社の宿立音やせ度、も河
風のあぐうありすと。からぬやうあるべし。そんじきまうとく育
てばあくたけぬ方ちがうすと。うるく。どこのいこも藩遍よ
はまくと也

家子郎はやくかくと一月吉祥かく六首。名所の集
ゆゑにまつはり。身の病をくわれとアシテ年を
ゆゑに賜らまされと。考へ事はほきゆく。ほきゆく考へ
せんじうけてまくと。考へのをぐのとすみかうておぞそり
神のわぬひとと。まくと。

三義教

新

前園白殿

新

よのほのまくとひふかくとゆくとまくとまくと

流俗のまくわらにあた。被た。衣資。被まくとゆくとまくと

家方紹
拾貯

新

よのほのまくとひふかくとゆくとまくとまくと

よのほのまくとひふかくとゆくとまくとまくと

し。躬字也

新

よのほのまくとひふかくとゆくとまくとまくと
あおのとさむかくとゆくとまくとまくと
ひづくとひづくとゆくとまくとまくと
よのほのまくとひふかくとゆくとまくとまくと

よのほのまくとひふかくとゆくとまくとまくと

よのほのまくとひふかくとゆくとまくとまくと

よのほのまくとひふかくとゆくとまくとまくと

よのほのまくとひふかくとゆくとまくとまくと

よのほのまくとひふかくとゆくとまくとまくと

もいハ君よ有ゆきとてあさきか地レとすれタシ。
あもくすくぬ月ムツカニとてき。いあらそい紙シをふ
きとあく歌ウタとん有リくまタかの令下イシヤウをシ。

隆縁院
詞花林

玉雅

ととくねテテク一モトが。かくめそとモモう神ミコトへおもへ。はくと
みよのほはりきとハヌす。すゞにさるスルくとスルく

院入道大師とスルく。紅葉

まのとくにうづくばうまちでぐうじねのアフなれアフを
との本ハタチをむすんで。のくは。身ヒからし紅のまよアマヨうと
えでさんざくうつて。おのまよアマヨうと。おほくとスルく
とくす。そのれハシテのわカとスルと。詞シキ也。のを
のしづシフさシ聲ヨウをシきとスル。日ヒすシをスルと。わざワサす
ばがふ田タケのよシづシ。おなづくにれナシとスルと。うさ車カマツ
紅葉レバでスルやカ。

住原ひきのれ野ノハラや秋ツカツカと。紅葉レバ

おのれよシカ。さシ貧ブシ。うシばシうシうシうシ也。紅葉

一色ア菊代ハナシタダつぶへ香カハラとスルがくとスルおハナ。

詔盡佐ハナツシサ

紅葉

くそもシテ晴ハタハタのれハタハタ下シテ紅葉レバ。やハタ不ハシそシはシくシとスルん
トスル不ハシそシ。ほシくシ。不ハシそシ。絶ハシれハシ。おハシしハシ。ばハシ。どハシもハシあ
ろハシくシ。半ハシは深ハシそシりシ。よハシ度ハシく深ハシるハシ。深ハシ度ハシ。半ハシよハシ
きハシ。入ハシ度ハシく深ハシるハシ。深ハシけハシのハシ。とスルをスルてスルと。
一ハシを一ハシ。二ハシを二ハシとスル。入ハシ度ハシく深ハシるハシ。深ハシ度ハシ。半ハシよハシ
裡ハシ一ハシ再ハシ入ハシ之ハシ紅ハナ。花營三。うハシとスルと。無ハシく深ハシるハシ。無ハシれ
タハシるハシに深ハシそシとスル。

不ハシそシすシまシすシ。すシそシやシ。紅葉

村ハシのハシそシれハシれハシれハシとスル。かシわシれハシとスル。かシわシれハシとスル。
秋ハシくシれハシれハシれハシとスル。かシわシれハシとスル。かシわシれハシとスル。

幸子トシトモリハ他不アアキニアキ也。ばくアシテハ外の外れ
本をモシル候也。所モキヤの外れ御葉をほるゆれ候も
うへ合て、さくに落としゆる也。此一幸子トシトモリアソジ
あよトモトセ

野一秋のまのは難波より御行者様を國までとて度よて御ゆ
國をえ西二年六月十七日辛丑年十一歳新後撰玉善新平戴新
捨遺新後捨遣新後撰新後撰全作者 津守家系圖云
圓平 四十一代祖 聖道 圓助 四十六代正羅
上接津守 下接津守 圓冬 五十六代傳住 圓道 住信上
圓夏 住信下
秋風の吹きあそび御葉をうすむれりとひよやうづん
群生トモバシタモアカトはまのままれ社の秋の初後教清流 秋の初
月よどりすわとある。秋風をほくべて御葉れどをやまと
かして、音方アモアヒトモル御葉。國をひ寄せ

金蓮寺ゆく 月景極

東方の里にて月をうらみくくと、じう風とたらえねぐのよらひ
櫨アシマセ。だらえひすゞに立つる枝也。我宿の在れ三枝やみ、
つと思の外にあうこひやう中通書 桜よけり桜のうちうえれ
御葉にいすの尾うれもくつかひたる寂蓮 月立て東方乃葉
絶ゆくのたらえに月のうらゆ也

渉子き大細言歌すよ首ふ 月景極

終田ふよかれてまきあひとてあ葉とひう月江新ク郎
史紀頃羽卒乙云富貴不帰故郷如夜繡夜行集乃字

を前漢書項トシの名の錦トシあり。又うへりかくすうわろ
おとめふ葉ハタケの下の葉ハタケの下ハタケ。秋ハタケのあひだハタケとの
いふは英ハタケの葉ハタケの下ハタケ。秋ハタケの下ハタケ。秋ハタケの下ハタケ。
しとちも皆此故車ハタケと、錦トシのまき車ハタケなり。此すうわろ
月ハタケの出ハタケ門ハタケ。くらくて、どうの道ハタケをうちうづ。月ハタケあり。紅葉ハタケの
色ハタケあらざれて、見ゆうづのすうて、ハナ。ひえハタケは鶴也
と云ハタケ。月ハタケを葉ハタケを賞發ハタケする。かきじうれ鶴ハタケ。唐書
云。魏元忠還ハタケ宗州ハタケ拜ハタケ拂ハタケ上幸白馬寺ハタケ以送之。制曰。衣錦
畫遊ハタケ在平茲ハタケ日。みこみがきなるかひのあう幸也。古文後集
よ歐陽、永叔ハタケ。畫錦堂記ハタケ。此句也。自活ハタケを極ハタケされ
か葉ハタケのふ一ことをすく。もみゅうんハタケ。後人不無ハタケ相ハタケの御承ハタケ。そ
れぞもい人ハタケいふべき。そくやいふこゆハタケ。

萬葉ハタケ。宣室ハタケ。秋ハタケ。秋ハタケ。秋ハタケ。

時ハタケ氣ハタケをれ。庭ハタケ。月ハタケの。そやく。くまく。秋ハタケ。ふ
そ。う。庭ハタケ。月ハタケ。そ。う。秋ハタケ。秋ハタケ。
す。よ。ま。う。草ハタケ。に。比。て。ま。う。樹ハタケ。に。風。く。よ。この。日。れ。れ。
風。く。も。見。て。く。そ。う。ま。う。秋ハタケ。秋ハタケ。秋ハタケ。秋ハタケ。
讀千載集ハタケ。奏ハタケ。覽ハタケ。後ハタケ。櫻ハタケ。者ハタケ。往ハタケ。古ハタケ。社ハタケ。よ。て。又。首。寺。議
さ。ま。さ。に。わ。み。て。そ。

此詩亦しも。候篇秋ハタケ。終ハタケ。す。ま。ア。ト。

續千載集ハタケ拾芥抄ハタケ。文保三年己未四月十九日。依後
序。宇多院院宣前権大納言為世卿。撰之二年百二十首。
中。の。れ。新。よ。う。く。あ。り。た。う。月。の。う。こ。も。新。よ。う。く。
有。明。の。月。の。う。く。あ。う。月。の。う。月。の。う。月。宮殿也。天寶遺事云。唐明皇遊月宮。見天府。榜曰。廣寒清

月の勢を云むに少く底意の月空氣に沈するも
獨り而首

卷之三

いふ事はあらうが、さういふ事を二枚は
まことせば、それと二枚は
ありとて、秋の物五
物のうちあると、物のうちあると、
もとからて、立正川をやさんわちくに
もとからて、川へ朝日には、かえりたるを
とき、清浦村、立正川をやさんわちくに
秋水定家、立正川をやさんわちくに
りゆくや。首のひれのまくらと、あひて、立正川を
まくらと、立正川をやさんわちくに
八九月の事である。此の事は、立正川をやさんわちくに

すれぬれこゝろを

まろそとすふねじとくうなむとらひとれぐまくちゆを
秋のよきわくとくいづるよしとくをば。何よりわじまくじとせ。
まかと月日たるすはまくとも惜じまつたひと。わじみゆくら
てよもぐり

後
書秋露

やゑはまかあふくうて秋神れみそとあふめうわにれ
詩蕉、兼荷云、兼荷蒼々白露為霜。太戴礼云、露路結為
霜。春の變じして霜とす。霜とすがくとえり。小林の
處をは霜とをきへてれたの後うむをの冬至中陰長
候始冬。小林
れゆり。處とくわくとじよびれけの神を三宿而往。小林と
く。秋の處は霜とすがく。秋神の後アあづう。おもさう
とあづべば處とくうだ。秋の處とくうと



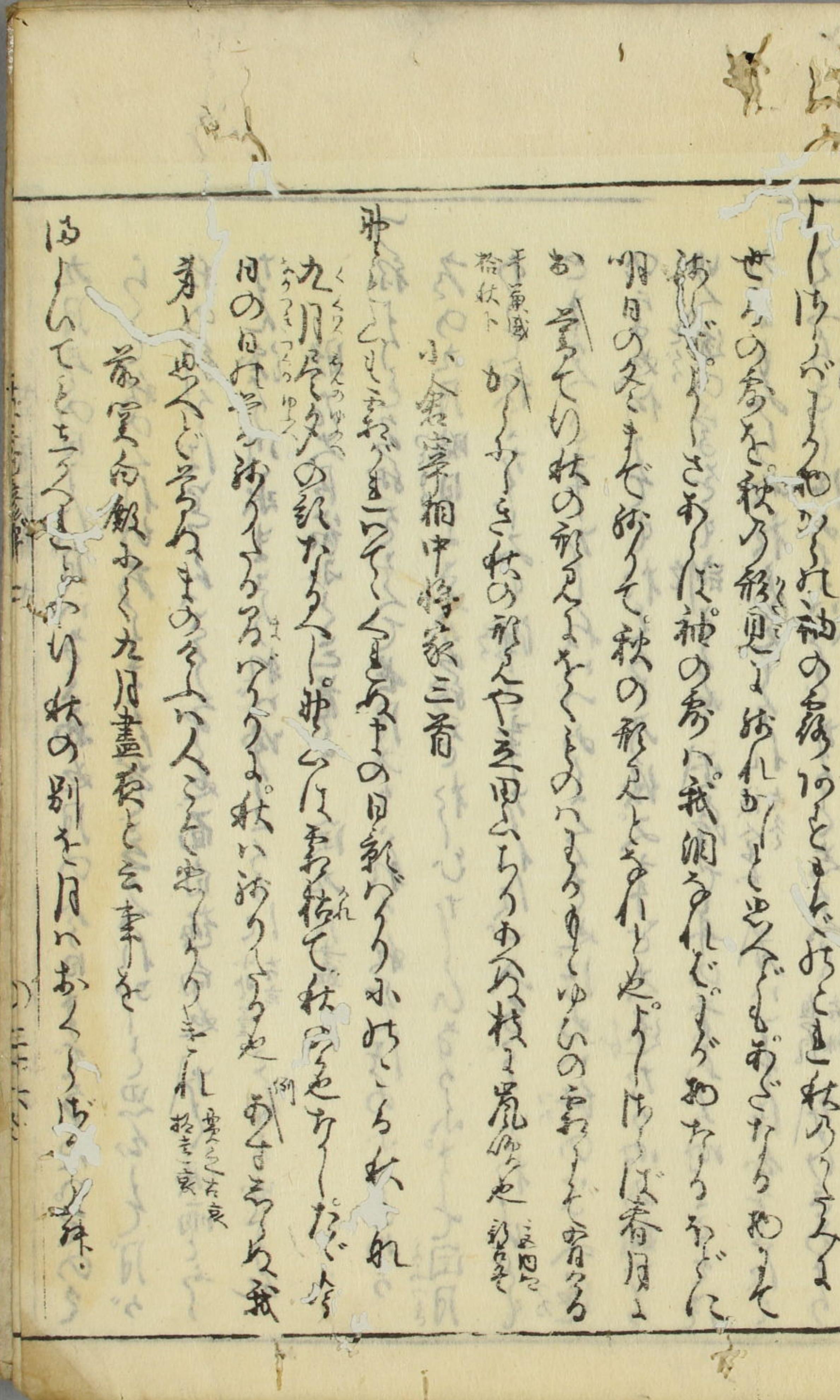
トレウバトモアツれ神の處ううとすとおとと秋ううよ
せうの處を。秋ア秋更よあれ。とせうとせうとせうと
れ。トトとあは神の處い。秋洞うれど。とせうわたらわたら
秋の冬を。とせうとせうと秋の形と。とせうとせうと。トトトト
とせうとせうと秋の形と。とせうとせうと秋の形と。とせうと
とせうとせうと秋の形と。とせうとせうと秋の形と。とせうと

平風閣
吟秋ト
小倉寧相中將家ニ首

和
九月尼タの秋ならく。ゆうは事古て秋尼也か。たぐ今
日の日れ。事古て秋尼也か。秋の秋。秋の秋。秋の秋。
秋の秋。秋の秋。秋の秋。秋の秋。秋の秋。秋の秋。
秋の秋。秋の秋。秋の秋。秋の秋。秋の秋。秋の秋。

ほじてとよく。とよく。秋の別を月へあくらひ。

秋葉



九月の日より十月へある。也。月の今日までうつむきのそ
らくのまゝなりてまゝとぞもとくれりと思ふ。月が
はり外とばよとまゝとぞとぞ面白趣向也。かく涙雨とす
かん渓り川水また流れゆくうちに小此空こゝりせらるれ
賜た大臣家かくこ首。 国九月盡

つゆもとろぬをうて長月かく流れゆればよめやう
たの九月晦日晦日よとくぬをわじたしゆうふすて国月
あそ秋をもみも深き事なれば、一入もくわねども
こまくさの事かくねりづかよくくもせほるい終の事又逐
の事を何りてもむくと乃後又事を志遠志遠すひ詞す
ゆく事の事をも前前さるを 国暦で十年の事からゆく事とせ
かくよしのれもとし色後金承へて年を公をもとと
ことすきにほかなゆきをもととまく鳥目がくとあります
へと詞せをとく

風雨夜深人未眠
不知何處是歸船
但聞急雨敲窗戶
一葉孤舟在水邊

